

令和6年10月



スクールカウンセラー 中野隆治



「教室」



みなさんにとって、休み時間の教室はどんな場所でしょうか。友人と談笑する場所、多くの情報を交換する場所、スマホをいじる場所、ひたすら読書に励む場所、次の授業への下調べをする場所……様々な捉え方があると思います。

もちろん、一方では、教室は授業を受ける場所です。教室という限られた空間の中で、一人の先生の個性と人格が、知識と教養の解釈という形で、生徒の人達と向き合うのです。休み時間とは違った、どこか張りつめた空気が流れているのではないのでしょうか。

さて、次に掲げる詩の一節は、授業の中での教室を思い浮かべながら読んでほしいと思います。

教えるとは 希望を語ること

学ぶとは 誠実を胸に刻むこと

……………

(ルイ・アラゴン『strasブール大学の歌』)

第二次世界大戦のさなか、ナチスドイツによるフランス蹂躪に抗議した多くの学生たちの犠牲を悼んだ、フランス詩人による長い詩の一節が今も歌われています。学問の真髄の一端を言っているようで、今も人々の心に訴えてくるのでしょうか。

教壇に立った先生が語るその一語一語は、実は人が生きるための希望に結び付いていなければならない、学ぶ側の人達は、その一語一語を誠実にノートに書き留めておかねばならない、ということでしょうか。

希望を語る先生がいて、真摯にその言葉を心に受け止める生徒がいる……教室とは、きっと、そんな場所ではないでしょうか。

日本の幕末の思想家・教育者吉田松陰は、「学は、人たるの所以を学ぶなり(学問は、人が人であるそのいわれを学ぶものである)。」と言っています。学問を学ぶのは、人間とは何か、人としてどう生きて行けばいいのかを学ぶためである、というのです。

普段、何気なく教室で先生の話や、黒板に書かれた文字をノートに書き留めるのには、深い意味があるということでしょうか。教えることと学ぶこと、そして生きること……高校の3年間で、それらのエッセンスを身に着けることが出来たら、みなさんは、人間として、一段と大きく成長していくのではないのでしょうか。

ようやく落ち着きを見せる秋の気配の中で、教室という場所の意味を、ふと考えてほしいと思います。